住まい備忘録 第27回

住まいづくりのこだわり

㈳日本建築家協会(JIA)沖縄支部相談役
山城　東雄 ㈱東設計工房

N邸外観

私は若い頃からの夢、一級建築士を取得したら独立開業をし、好きな住宅設計に取り組むことを強く願い、昭和53年秋、(当時海洋博後の不景気の中)一級建築士事務所東設計工房を開業させていただきました。浦添での開業は、さして人脈もあるではなし不安も多くありましたが、ただひたすら、良い建築を創れば続けられる。その一心で設計活動に入りました。当時は貪欲に建築雑誌をむさぼり、また先輩建築家の作品を見るなど何か新しいことが出来ないかを常に考えて参りました。

私は何とか赤瓦屋根をもっとつくれないかと屋根にこだわり続けるうち、木造志向のNさんとの出会いがあり、依頼を受け、そこで規模が少し大きいこともあり中庭を取り込み、屋根を木造架構でやることを提案、初の中庭を持つ混構造赤瓦屋根住宅が誕生、昭和60年のことでした。その3年後、士会の先輩がそのN邸を日本建築士会連合会〝私の推薦する作品展〟に推薦していただき、その時はじめて全国での最優秀賞を頂けたことは私の住宅設計に大きな自信となり、混構造を今日まで続けることになりました。

幸せは食卓の上にあり

こだわりのもう一つに食事室がありました。幼いころの我が家でも石油ランプの下、父がこさえた円卓ちゃぶ台を囲んでの団欒、今は映画でしか見ることができない昭和の食事風景でありました。

ある小学校で児童に家での食事風景を描かせたらテレビが大きく中心にあり、人は小さく描かれてしかも一人で食べている風景が新聞で報道された。現代の世相の深層心理を読み取ることができると学者の言。

私どもへの住宅設計依頼の若い方々へ、私はいつも食事室にテレビをおかない習慣を身につけることをお勧めしている。でないと折角お母さんがつくった料理を、目はテレビに釘づけ、無意識のうちに口を動かすだけの、それこそ味気ない食事風景と化してしまう。そんな中から家族関係が希薄になるのではないだろうか。それで私は食事室のしつらえに、より神経を使い家の中で一番大事に考え設計をしています。幸せの原点はまさに食卓にあると信じています。

さらにもう一つのこだわり、戸建て住宅の良さは庭とのつながりにあると考え、庭に思いっきり開いた開放感のあるスタイルを心がけ、多くの方々に喜ばれています。パタンランゲージの著者、建築家のC・アレクサンダーは「家の床を周囲の土地に直接つなげないと自然から孤立した建物になる」と言っている。そのような開放感がまた向う三軒両隣のまちづくりにつながるのではないでしょうか。建築は人と人を結ぶ場づくり、設計者の役割は大きい。設計は住宅に始まり住宅に終わるといわれます。住宅設計が全ての基本とも言われます。これからも精進を重ね、より沖縄らしい風土を生かした住まいづくりに努めてまいります。

中庭に開いた食事室　伊祖の家